

甲斐市立竜王北小学校 学校関係者評価書

令和5年2月20日（月）

甲斐市立竜王北小学校 学校関係者評価委員会作成

＜学校関係者評価委員会＞

- 実施日：令和5年2月8日（水）
- 委 員：学校評議員：輿石正寛、小宮山千雪、小川啓介、天野澄子
P T A会長：田中美幸
P T A副会長：長谷川さやか、成井あづみ、田中奈美
校長：古屋正樹、教頭：小山田拓也

I 学校側から提案された内容

（教職員自己評価を中心に）

- 1 達成状況について
- 2 改善策について
- 3 まとめ

II 協議された主な内容

○学校経営について

学校経営方針や学校教育目標に基づいた教育活動を行っているとした教職員の割合が高い。一方、PDCA サイクルで教育活動が取り組まれているについて、A 評価が 60%を下回っており、他の項目より低くなっていることから、その趣旨や目的を再確認していく必要がある。

また、特別支援教育についての A 評価が 50%を下回っており、特別支援教育についての統一した意識や連携体制の充実が十分でないと考える職員が少なくない。

○学校運営について

適切な情報管理の下で、報告・連絡・相談等の情報共有がなされ、共通理解をもって協働体制の中で教育活動が展開されている。危機管理マニュアルの理解については、引き続き危機管理に関する共通理解や危機対応実践力の向上について取り組む必要がある。校務支援システムについては、その活用が進んでいる。また教職員の働き方改革も意識の上では浸透してきていると言える。

○学習指導について

質の高い教育を目指し、確かな学力を育成することに一定の成果を見出していることがうかがえる。しかし、一部児童が学校の授業が楽しくない、授業が分からないとしていることを受け止め、

今後も「わかる授業、楽しい授業」づくりに向け、教師の授業力向上や、きめ細かな指導体制の充実を図っていく必要がある。家庭学習の充実については、家庭の理解、協力を得て、共通理解のもとで取り組まれている。

○生徒指導について

教師が児童一人一人を見つめて丁寧に対応し、校内研究と連動しながら学級集団づくりに取り組んできた。キャリアパスポートの有効活用については、多くの教員がいまだ手探りの状況であると言える。ユニバーサルデザインの視点で、学習規律や生活規律を整え、だれにとっても分かりやすい授業や、当たり前のことを当たり前にする児童の育成に努めてきた。

○地域との連携

コロナ禍により、地域人材や外部指導者を招いての学習機会が依然として少ない現状がある。タイミングを計り、内容と方法を工夫しながら出前授業等を実施してきた。今後も引き続き地域との連携・協働について検討していく。また学校ホームページや各種おたより等を活用した情報発信に努めてきたが、保護者アンケートの A 評価は依然として低い傾向がある。

○学校の特色に関して

「ユニバーサルデザイン」「ノーチャイム制」「『広場の時間』の活用」「モジュール学習」について、一定の成果が得られている。これら本校の特色としてあるものは、今後も共通理解のもとで取り組んでいく。

○創甲斐教育について

学習指導要領の適切な実施を通して学校教育目標の実現を図ることで、創甲斐教育が掲げる「国語力」「自己表現力」「体力」の向上に迫っていく。

<学校関係者評価書>

I 全体評価

A 評価のみを見れば低いものもあるが、B 評価を含めた肯定的評価はどの項目も高い数値となっているため、教職員は胸を張って今後も教育活動に取り組んでほしい。

コロナ禍の学校は、様々な制限や制約の中で教育活動を展開しているが、教職員が共通理解のもとで熱心な指導を展開している。特に「確かな学力」を育てること、きめ細かな指導を展開すること、コロナ禍にあっても集団生活を営む力を育てることができたことは大きな成果である。

肯定的な回答率が高い項目については更なる向上を目指すとともに、肯定的な回答率が低い項目については、その理由や実態を明らかにし、改善を図る必要がある。

II 特 徴

<学校教育目標・学校経営について>

○教職員自己評価の結果から、学校経営方針に基づき、個々の教職員がしっかりとした問題意識を持ち、全体で課題を明確化し取り組んだことがわかる。いじめや不登校など、児童一人ひとりの課題に応じた対応に努めることができている。

○PDCA サイクルの4つの項目のうちの何に課題があるのか明らかにすることが大切である。

○特別支援教育については職員会議等に一項設けるなど工夫をしながら情報共有を密にして進める必要がある。

<学校運営について>

○今年度も引き続きコロナ対策の中で中止や変更になった行事も多いが、運動会等実施できた学校行事を通して、子ども達の成長につながる取り組みができている。

○危機管理のみならず、施設設備の修理修繕などにおいて、若手教員には経験豊富な先輩教師が実際に一緒にやって見せながら教えていくことも必要。若手は様々な学校運営における知恵を学び取ってほしい。

○教職員の多忙化が社会的に取り上げられるようになっている中、教職員自身に「余裕」や「ゆとり」をもたらすためにも、チーム体制をさらに充実させたり、時間を効率的・効果的に活用したりする様々な工夫を試みていく必要がある。

<学習指導について>

○学校教育の中心は学習指導である。ICT 等、従来の一斉指導とは違った方法や環境の中で、子どもたちは深く学んで育っている。教職員も新しい方法について試行錯誤していることがうかがえるが、その中から成果を上げより良い方向性を見出していると考えられる。

○学習がきちんと定着しているのか不安を感じている児童、保護者へのケア、フォローに配慮してほしい。学習についての項目での C、D 評価をいかに「ゼロ」に近づけるか、そのためには授業の中での成功体験が大切であろう。

<生徒指導について>

- 課題を抱えた児童について、全教職員で共通理解をし、同じ歩調で対応して欲しい。担任や一部の教師の負担にならないようにお互いに協力し合うことが大事である。
- 今後も子ども達とのコミュニケーションを深めながら信頼関係を築く中で、問題行動の未然防止や早期発見、早期対応を図っていくことが大切。

<地域との連携について>

- ホームページの充実も引き続き進めてほしい。紙ベースでの発信も「読み手目線での発信」としては意義がある。以前、地区の回覧に学校だよりがついていることがあり、学校の様子がよくわかった。地域の学校として地域の方々に学校を理解いただくことは地域との連携につながる。
- 地域の高齢者は学校の役に立ち、子ども達と触れ合えることが生きがいにもなっている。一方で、登下校の見守りなどは、担い手の高齢化も地域の課題となりつつあることを学校も踏まえておく必要がある。

<学校の特色について>

- 「ノーチャイム制」は、子どもたちの自ら考え行動する力の育成に有効である。「ユニバーサルデザイン」「広場の時間」とあわせて引き続き有効に活用して欲しい。

<創甲斐教育について>

- あいさつ、整理整頓、清掃など、当たり前のことがきちんとできる子どもを育ててほしい。

Ⅲ 今後の課題として確認されたこと

- PDCA サイクルを通した教育実践と評価の具現化。
- ICT 機器の積極的な利用と、どの子にも「わかる、楽しい授業」の推進。
- 教職員の共通理解のもとで、歩調を合わせた特別支援教育や生徒指導の充実。
- あいさつが自然にできるといった、当たり前のことが当たり前でできる子どもの育成。
- 教職員が子どもたちと向き合う時間と心の余裕を確保するための業務改善、働き方改革の推進。
- いじめ等の早期発見と対応等、自己評価で課題のあった項目について、教職員の資質向上と意識改革の推進。
- 学校ホームページを中心とした積極的な情報発信による地域連携の推進。
- 高齢者にとっての生きがいにもつながる、地域人材の積極的な活用。
- 子どもたちや教職員を取り巻く環境が変化している中で、子どもたちには、自分を守り、他も守り、自分自身を生かす人になってほしい。家庭と地域と学校が連携し、お互いに努力することでそれはなし得ると思う。

※特記事項 特になし